

戸津5号窯

石川県古窯跡調査(第4次)報告

1979・3

石川県教育委員会
戸津古窯跡調査委員会

例 言

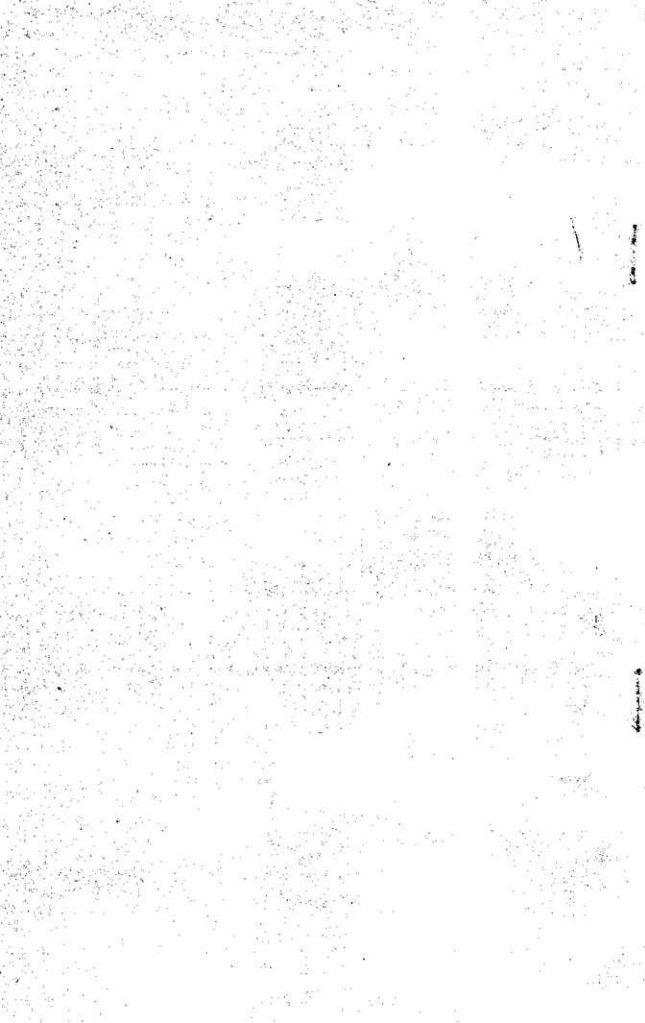
- 1 本書は、「石川県古窯跡調査5ヶ年計画事業」の第4年次分として、昭和49年10月1日～10月27日に亘り、石川県教育委員会・戸津古窯跡発掘調査委員会が発掘調査を実施した、石川県小松市戸津町に所在する戸津5号窯の調査報告書である。
- 2 本文の成稿、上梓にいたるまでに下記の諸氏によって作業分担された。
 - 〔編集〕 小村 茂・宮下幸夫
 - 〔発掘調査〕 小村・宮下・宇佐美 孝・平田天秋
 - 〔写真撮影〕 宮下
 - 〔遺物整理〕 小村・宮下・田島正和
 - 〔遺物実測〕 小村・田島
 - 〔製 図〕 小村・宮下
 - 〔図版編成〕 小村・宮下
- 3 本書は下記のごとく分担執筆した。

高堀勝喜	I
小村 茂	I、II-1、V、VII
宮下幸夫	II-2、III、IV
広岡公夫	VI
上野与一	VII
- 4 発掘調査団の編成は本文に記載した。

目 次

本 文

I 序 説	1 頁
II 既往の調査と発掘経過	4 頁
1 既往の調査と保護	4 頁
2 発掘日誌	10 頁
III 遺跡の位置と周辺の遺跡	13 頁
IV 窯体の構造	14 頁
(1) 焚口および燃焼部	14 頁
(2) 焼 成 部	17 頁
(3) 煙 道 部	17 頁
(4) 前庭部および灰原	17 頁
(5) 付属施設	17 頁
V 遺 物	18 頁
1 出土須恵器の観察	27 頁
2 出土須恵器の計測	34 頁
VI 戸津古窯址群の考古地磁気測定	38 頁
VII 総 括	42 頁



I 序 説

本県における窯跡の本格的な調査は、浜岡賢太郎、嵯峨井亮（故人）、橋本澄夫、吉岡康暢氏らの石川考古学研究会により昭和35年から開始された。このとき調査された代表的な窯跡である鹿島郡の鳥屋古窯跡群春木3号窯や河北郡高松・押水古窯跡群の黒川2号窯は当地方の編年の標式窯としての地位を今もなお保ち続けている。吉岡氏は春木窯、黒川窯の成果に戸津窯跡出土遺物の再検討を加え、さらに福井県の窯跡調査資料を検討し、昭和42年『日本の考古学』窯業・北陸において、北陸の須恵器を8様式に編年し、須恵器窯の拡散から終焉に至る様相を、その背後によこたわる歴史的諸条件をも加味し大成された。この編年試案は今日に至っても大略において修正をみることなく、研究者の基本的な編年指標となっている。しかし、近年の各地域での須恵器分布調査の伸展と発掘調査の実施の増加で、より狭少な範囲での編年の試案が打ち出されつつある。

南加賀地方における窯跡調査は、昭和25年に実施された戸津町通称六字ヶ丘の雑木林中の六字ヶ丘古窯（現在は戸津8号窯と改名されている）に始まる。この調査は本県における須恵器窯調査の嚆矢でもあったが、その後、本格的な調査が実施されることなく昭和40年代に至った。そして昭和44年、加賀芙蓉カントリークラブの加賀温泉郷ゴルフ場造成にあたり、行政の開発に対する保護姿勢の欠如と研究者不足のため、不十分な調査のまま、いくつかの貴重な古窯跡が破壊埋滅減するという事態をひきおこした。この事態を憂えた石川考古学研究会では、県当局に対して窯跡の分布調査と保護対策を要望し、県教委と石川考古学研究会は石川県古窯跡調査事業5ヶ年計画を協同立案し、珠洲古窯跡調査を初年度事業の対象とすることを内定した。ところが、にわかには九谷古窯調査の必要が生じ、第一・第二次事業として九谷古窯、第三次事業として珠洲法住寺3号窯調査が実施された。

ここに報告する戸津5号窯跡は石川県古窯跡調査5ヶ年計画の第四次事業にあたる。窯跡選定にあたっては、平安時代須恵器窯の究明を目的とし、平安期に属する多数の窯跡が所在する戸津地内において、地主の積極的な理解を得ている本窯を対象としたのである。調査にあたっては、小松市教育委員会の全面的協力のもとに、発掘調査委員会の指導で実施した。以下その概要をご報告する次第であるが、各位のご叱正をお願いするとともに改めて関係各位に対し深甚な謝意を申し述べるものである。

南加賀古窯跡群は現在、小松バイパス、特殊園場改善事業や葡萄園整備等のため、その多くが埋滅の危機に直面しているといっても過言ではない。このような状況のもとで、小松市教育委員会では昭和52・53年度において、国庫補助を得て南加賀古窯跡群詳細分布調査事業を実施しており、今後、窯跡保護に積極的対策がとられることを期待するものである。また石川県古窯跡調査5ヶ年計画の枠外において、九谷古窯に後続する若杉古窯が昭和47年に、さらに昭和48年には、

珠洲古窯とともに県内の中世窯の双壁をなす加賀古窯の発掘調査が実施されていることを付記しておく。

(高堀勝喜・小村 茂)

第4次石川県古窯跡(戸津古窯)発掘調査委員会規約

- 1 第4次石川県古窯跡(戸津古窯)発掘調査事業(以下「発掘調査事業」という)を円滑に遂行するため「第4次石川県古窯跡(戸津古窯)発掘調査委員会(以下「調査委員会」という)を設置する。
- 2 「調査委員会」に次の各号より選出された委員若干名を置く。
 - (ア) 学識経験者
 - (イ) 石川考古学研究会々員
 - (ウ) 関係教育委員会教育長
- 3 委員長は委員の互選により決め「調査委員会」を代表する。会議は委員長が招集する。
- 4 「調査委員会」は発掘調査事業の実施に必要な基本的事項について審議する。
- 5 「調査委員会」は顧問及び専門委員を置くことができる。
- 6 「調査委員会」は第4項の審議により決定した発掘調査事業を実施するため「第4次石川県古窯跡(戸津古窯)発掘調査団」(以下「発掘調査団」という)を編成する。
- 7 「調査委員会」の決定した事項及び事務の処理は石川県教育委員会事務局があたる。
- 8 「調査委員会」は発掘調査事業が完了したとき解散する。

石川県戸津古窯跡発掘調査委員会名簿

顧問	三上次男	東京大学名誉教授 青山学院大学教授
	楢崎彰一	名古屋大学助教授
	秋田喜一	石川考古学研究会常任顧問
委員長	川良雄	小松市文化財調査委員会 加南地方史研究会会長
委員長代理	高堀勝喜	石川考古学研究会会長
委員	浜岡賢太郎	石川考古学研究会代表幹事
	上野与一	石川考古学研究会幹事 北陸大谷高校教諭
	槻木慶雄	石川県教育長
	根上淳朔	小松市教育長

事務局 本間 敦 胤
 中田 宏 策
 川東 栄
 小村 茂

石川県教委文化財保護課長
 同 課長補佐
 小松市教委社教課長
 石川考古学研究会幹事
 同 主事

石川県戸津古窯跡発掘調査団名簿

調査団長 高堀 勝 喜
 団長代理 浜岡 賢 太郎
 調査主任 上野 与 一
 調査員 野尻 与 之 佐
 岩城 襄 一
 葦谷 栄 一
 太田 和 夫
 岡下 穰 男
 土井 輝 嘉 章
 四柳 七 郎
 山本 公 夫
 河崎 与 志 雄
 平田 天 秋
 宇佐美 孝 茂
 小村 茂
 小宮 下 幸 夫

専門委員
 事務局

石川県立大古聖寺高専校教員
 加賀市立山代中学校教員
 石川考古学研究所員
 石川考古学研究所員
 石川立東和中学教員
 石川立大古聖寺高専校教員
 石川立大古聖寺高専校教員
 小松市立博物館専門委員
 小松市立工業高等学校教員
 石川立大古聖寺高専校教員
 県教委学校指導課指導主事
 福井大学教育学部助教授
 県教委文化財保護課係長
 石川考古学研究会員
 石川教委文化財保護課主事
 県教委文化財保護課嘱託
 石川考古学研究会員
 小松市立博物館学芸員

II 既往の調査と発掘経過

I 既往の調査と保護

戸津町周辺において、多量の土器が出土することは早くから知られていた。幕末に書かれた『江沼志』には、「戸津、古陶器を製せし所ニカ所有り、戸津焼と云ふ」とあり、相当早くから戸津で窯業を行っていたことが知られていたのである。しかし、それが今日でいうところの奈良・平安時代の須恵器を焼いた窯であることが判明したのは戦後のことである。

昭和25年8月、高堀勝真、上野与一両氏の指導のもとに、松任農学校郷土クラブが主体となって、石川県で最初の須恵器窯跡発掘調査が実施された。昭和26年に報告書が刊行された⁽¹⁾が報文中に「ワク谷の窯」として記載されている窯跡は、昭和49年の石川県遺跡地図及び同地名表で、戸津1号窯跡と改名された平窯の須恵器窯跡である。

昭和35年に至ると戸津地内で平安期に属する釐瓦が採集され、その窯跡確認調査が昭和38年7月に小松高校地歴クラブ、北陸大谷高校地歴クラブ及び片山津中学校郷土研究部の協力を得て、上野与一、吉岡康暢両氏の指導のもとに実施されたが、窯体を確認するに至らずも好資料をえている⁽²⁾。これが戸津3号窯及び戸津4号窯である。3号窯からは双耳瓶、甕、4号窯から瓦、台付坏、坏、坏蓋、皿、埴類などが検出されている。後に、吉岡康暢氏の編年試案において、北陸須恵器編年の第Ⅷ様式として平安後期に位置付けられている⁽³⁾。

その後、北陸大谷高校地歴クラブ員らは、上野、小村の指導のもとに、戸津、ニツ梨、那谷及び箱宮地区などの丘陵を精力的に踏査し、従来不明とされてきた中世窯業生産の実態を明らかにした。しかし、諸開発の波は他地域の例にもれず急速に押し寄せており、南加賀古窯跡群の形成されている丘陵にもわかに変貌しつつある。とりわけ昭和44年に計画された加賀温泉郷ゴルフ場造成は窯跡が分布する丘陵の四分の一あまりをその対象とする大規模なものであり、行政当局の保護対策の欠如に研究者不足も手伝い、不十分な調査のまま重要な窯跡が破壊され埋滅してしまった。そして昭和48年の第二次ゴルフ場造成にあたっては、昭和44年の造成時の反省から、開発側との再三にわたる協議の結果、分布調査において発見された遺跡は現状保存することとした。調査の結果は、2群6基の中世瓷器窯跡と若干のタタラ址が確認され、あらためて重要な地域であることが認識された。一方、小開発事業も跡を断たず、昭和45年には、ニツ梨通称一貫山において土砂採取にとまらざる緊急発掘で、奈良時代後期に属する須恵器窯が発掘されている⁽⁴⁾。いずれも調査終了後には消滅してしまうなど、開発に対する保護姿勢に問題が残される。

一方、須恵器や加賀古窯に対する研究も軌道にのりつつある。加賀の中世窯業の存在が明らかになったのは昭和44年のゴルフ場造成にとまらざる発掘調査であり、これを担当した上野によって詳細に報告された⁽⁵⁾。その後、昭和48年秋に金沢市で開催された日本考古学協会大会の第三分科

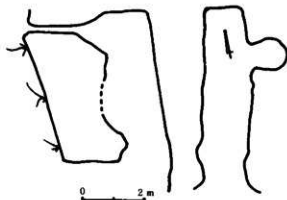
会において、大天王谷古窯が紹介され、あらためて北陸における中世窯業の一例として加賀古窯が認知されるようになった⁽⁶⁾。しかし、平安末期以後、連続して操業がおこなわれていたと思われた加賀古窯は、その後の精力的な分布調査にもかかわらず、室町期に至って姿を消している。この問題については珠洲古窯の場合と同様の要因によるものと考えられているが、桃山期に操業を始めている作見古窯とも関連付けて考えれば、室町期の空白期間もいずれは新資料を加えることができるものと確信している。

須恵器窯については、古岡氏の編年試案の検討から、南加賀地域独自の編年作業が進められている。しかし、いまだ窯跡発掘例も少なく、加えて近年の発掘調査で提起された問題が編年作業を遅延させている。例えば昭和51年の戸津9号窯で確認された極端なまでの窯構造の変化や糸切底の盛行は、灰釉陶や土師器工人との関係で複雑な問題を提起している。こうした研究経過のうちに昭和52年・53年度の2ヶ年に亘り小松市教育委員会で実施された「南加賀古窯跡群詳細分布調査事業」は今後の研究活動及び保護対策の一大転換期をもたらすものと期待するものである。

(1) 戸津1号窯

位置と状況

戸津町通称アノ山の南斜面に所在する。昭和42年、小松市教育委員会の依頼で、北陸大谷高校地歴クラブが上野の指導で調査を実施した。窯は岩盤を穿った掘り抜き平窯であり、主軸上の全長は5.4m、最大幅1.6m、主軸方位をほぼ真南にとる。煙道を2カ所有する点、特異な窯構造である。



第1図 戸津1号窯実測図

① 焚口及び燃焼部

焚口部分は崩落が激しく緻密な計測値を受けることができないが、およそ1.2mであろう。燃焼部は明瞭にできない。焼成部は、燃焼部との境が不明瞭であるため主軸長は不明である。床面傾斜は約3度で、殆んど平窯の部類に入る⁽⁷⁾。

② 煙道部

煙道は窯尻床より約4.2mで地上に開口している。窯尻より焚口に向かって、1.2mの地点にさらに1カ所の煙道を有する。このような特異な窯構造は他に例がみられず、このためタタラ関連遺跡と考えられてもいる。確証はない。戸津2号窯もほぼ同様の形態である。

遺物

昭和25年の調査の折、1点の完形に近い須恵器碗が出土しており、昭和47年の調査時も糸底碗破片が出土している。その他、長胴甕の破片もある。

(2) 六字ヶ丘古窯

位置と状況

二ツ梨町より戸津町に至る道路に開口した小谷左斜面の雑木林中にある。昭和25年8月、上野与一、高畑勝喜両氏の指導のもとに、松任農学校郷土クラブが主体となって、大聖寺高校郷土クラブ及び小松高校地歴クラブの協力を得て発掘調査が実施された。しかし、県下における最初の窯跡調査であって、十分に行き届いた調査ができなかったようであり、昭和28年に刊行された調査報告書も今日の研究資料として堪えうるものでないのが残念である。窯跡の形状については、報告書を引用すると、「登の穴窯であって傾斜は約30度前後、形は……。入口即ち火を焚く所は幅180cm、高さは20cm前後」であった。窯体の全長は実測図により計測するとおよそ19m弱となるが、現地の残存状態より推測すると10m前後であろう。



第2図 六字ヶ丘古窯
実測図

の底部糸切りの盛行や器種構成などから、10世紀前半の窯跡と考えられる。本窯は現在、戸津8号窯と改名されている。

遺物

昭和25年の発掘調査時の遺物は、現在、所在が不明であるが、窯内よりかなりの数量にのぼる須恵器が確認されたようである。したがって器種構成や須恵器個々の形状等について知ることができないが、幸い昭和50年、小松市教育委員会(担当、小村・宮下)で灰原の調査を実施しているので、先の調査の報告書記載事項と合せ検討すると、坏、坏蓋、台付坏とともに多量の碗、皿、台付皿が含まれており、碗、皿

(3) 一貫山1-I・II号窯

位置と状況

戸津町より二ツ梨町に至る道路が平野部に開口する右の小独立丘が通称一貫山とよばれ、窯はこの丘陵の南西斜面に所在する。本窯は、昭和45年4月、岡下儀氏の発見によるものであり、同年4月7日より20日まで、上野、岡下、土井輝男氏らの指導のもと、北陸大谷高校地歴クラブと小松工業高校地歴クラブにより発掘調査が実施された。

窯は上下2層からなり、上部を1-I号窯、下部を1-II号窯と命名され、I・II号窯とも同様の形状である。II号窯の計測値を示すと、主軸長9.9m、最大幅2.3m、焚口幅1.3mで、最大傾斜角は焼成部で20度であった。主軸方位はN-45°-Eである。

① 焚口及び燃焼部

発見された時には、焚口及び燃焼部の一部が削平されていた。傾斜角変換部分までの延長2.5m、焚口幅約1.3m(推定)、傾斜角5度を



第3図 一貫山1-I・II号窯
実測図

計る。焚口部の炭堆積は判別し難いが、およそ2層確認できた。燃焼部の壁にはスサ状の植物遺存体が多く検出してきたが、窯内では最も剥落が起りやすい部分であり、数度の修復で壁を補強しているためである。

② 焼成部

焼成部は主軸延長上で7.4 m、最大幅2.3 mを計る。床面傾斜は、焚口より約2.5 mの地点から約20度で直線的に煙道部に至っている。窯壁に修復の痕跡は認められなかった。

③ 煙道部

調査時には既に削平されており、確認できなかった。煙道部直下の床面に環類が整然と並べられていた。窯尻より地上までは約2.5 mであった。

遺物

台付坏、坏、坏蓋が大半であり、焼台に使用したと思われる燵破片の他、特異なものとしては、広口壺と獣脚がある。また覆土中より、丸底壺と底部糸切痕を有する無頸壺が出土しているが、窯跡との関係は判然としない。

(4) 戸津3・4号窯

位置と状況

戸津町よりニツ梨町に至る道路に開口した小谷の右斜面に所在する。昭和38年、上野、吉岡両氏の指導で北陸大谷高校地歴クラブと小松高校地歴クラブが発掘調査を実施した。調査は丘陵斜面に沿って数本のトレンチを設定したが、ついに窯体を発見することなく終了している。この時に出土した多量の須恵器は、戸津3号窯及び戸津4号窯として一括処理され、吉岡氏により、北陸須恵器編年のなかで、第Ⅶ様式として須恵器生産終焉期に位置付けられている。

遺物

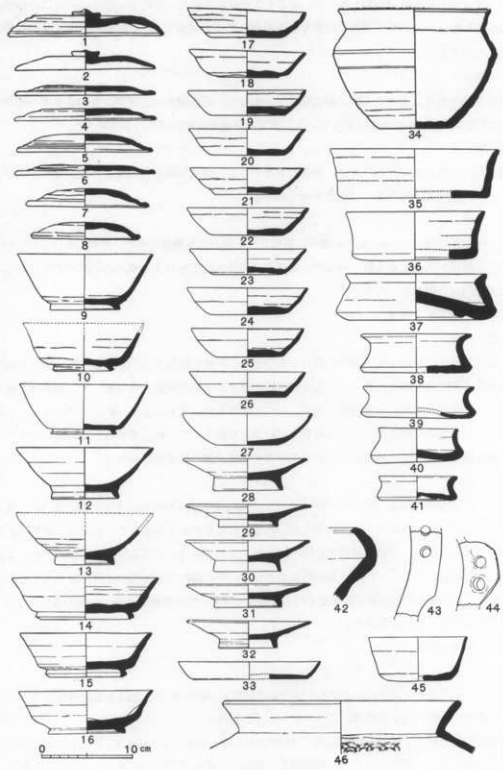
出土した遺物は戸津3号窯より、台付坏、坏、坏蓋、台付碗、台付皿に少量の盤、瓶、鉢、甕が伴っている。台付坏とセットをなすと思われる蓋に紐を欠くものが多く、碗では、内外面に凹凸を強く残している。戸津4号窯として一括処理された遺物は、双耳瓶を主体としてこれに少量の甕、徳利形瓶が伴っている。徳利形瓶の存在は、今の時点で灰釉陶の生産が認められない当地において、灰釉陶との関係を証するものとする説がある。窯体の検出がないのが残念であるが、今後、詳細な再調査を心掛けたい。

(5) 戸津9号窯

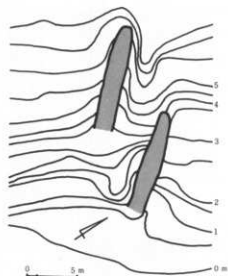
位置と状況

本窯は、戸津3・4号窯に対立する丘陵斜面に位置し、昭和50年、北陸大谷高校地歴クラブの協力を得て、上野、岡下の指導により小村・宮下が担当した。

窯体は主軸全長9.5 m、最大幅2 m、主軸方位N-36°-Wを計る。昭和25年における六字ヶ丘古窯(戸津8号)の調査の折、一部発掘調査されたが、調査は半ばで放棄されており、窯体の一部が横状に露呈していた。



第4图 小松市戸津4号窟出土土器実測图(郵資保管分)



第5図 戸津8号・9号窯地形図

① 焚口及び燃焼部

焚口及び燃焼部は昭和25年の調査時に掘りかえされており、正確な数値を得ることができなかったが、焚口幅はおよそ1mと推定され、床面は約20度で焼成部に至っている。

② 焼成部

主軸延長上で7.7m、傾斜角40度の急勾配で煙道部に至る。部分的には数度の修復が認められる。最大幅は約2mである。

③ 煙道部

煙道部は不明である。

遺物

坏、台付坏、皿にともない底部糸切りの碗、台付皿の比率が増えている。蓋に紐が消えている。碗底

部の糸切り痕を再調整するものがあり、糸切り痕の出現などから極めて興味をひく窯跡である。その他、甕、双耳瓶、鉢、長頸瓶などもみられる。

(6) 大天王谷1・2号窯

位置と状況

大天王谷支群は、県道那谷一分校線に開口し、北東方に伸びる奥行0.5kmの大天王谷の谷奥、左丘陵南西斜面に所在する中世瓷器窯跡のグループである。1・2号窯はこのグループの西端に位置し、発見時には露呈していたものである。調査は昭和48年3月より7月に亘り上野、岡下、小村が担当した。1号窯は焼成部上方が切断されており、全長を知り得ないが焚口から測って7.6m余りが遺存していた。2号窯も全長は不明であるが、両窯とも全長11m前後と推定される。以下1号窯について記すことにする。

① 焚口及び燃焼部

焚口は幅0.8m、焚口から分焰柱前面まで約20度で下降し、主軸長2mを計る。燃焼部と焼成部との境に、縦1.7m、横0.9mの長楕円形の分焰柱がある。

② 焼成部

分焰柱後方で、最大幅4.3m、床面傾斜角40度で窯上方へと続く。東海地方の例をのぞいて、当地方では戸津9号窯と本窯にのみ認められる特異な窯構造である。

③ 煙道部

煙道部は発見時に削平されており、不明である。

遺物

甕が主体を占め、これに鉢が伴っている。甕は口径50cmをこえる大形のもので、肩上部、胴

部、底部とにわけ、粘土紐を巻き上げた輪積み成形で、口縁がN字状をなす。鉢は口径40cm、底径13cm、器高15cmで、底面より口縁部にむかって引き上げる手法による細い下し目を有するものが通例である。これに口径25cm前後の下し目のない鉢が共伴している。甕の肩部には、2輪の菊花を重ね、右横に2本の葉茎をあしらった横6.5cm、縦2.8cmの版木を用いた押印を重ね敲きで一周する施文法をみる。他に2種の押印がある。

(7) 桃の木山1号窯

位置と状況

那谷町より分校町に至る県道に交叉するように那谷川が西流している。この那谷川が、那谷一分校線と交わる地点より北西にひときわ目立つ小谷がある。この小谷の開口部の丘陵が桃の木山で、窯はこの丘陵の東斜面に位置する。昭和52年、分布調査により発見された本窯は、翌年にカドミ対策事業に伴なり土砂採取に先立ち、石川県教委（小村・宮下が担当）により発掘調査が実施された。窯体は主軸延長7m、最大幅1.6m、主軸方位N-75°-Wを計る地下式の形態に属する。

① 焚口及び燃焼部

焚口は幅1.3m、燃焼部は焚口より0.8mの部分で幅が減じており1mを計る。この部分を焼成部との境とみなすことができる。

② 焼成部

焼成部は主軸延長で6.2m、傾斜角20度を計る。焼成部下方は、2層の床面があり、1次焼成後に修復しているが、焼成部上方床は2次焼成時に再度使用している。

③ 煙道部

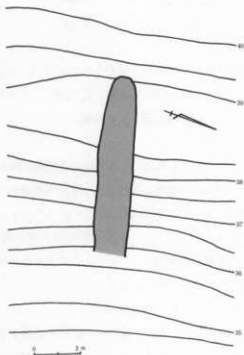
地上部に径約2mの掘り方があり、円錐形で窯体に至っている。

遺物

出土した遺物は整理箱にして30個分あった。

器種は環、環蓋、台付環、搦鉢、甕などがあり、長頸瓶の存在が目立つ。詳細は近く概要報告書が刊行される。

(小村 茂)



2 発掘日誌

10月1日 発掘器材の運搬と準備のため、小村、宮下が現地へ赴く。器材は保管のため一時小村宅へ収納する。午後、地主上田庄一氏宅へ挨拶に立ち寄った後、現地にて明日よ

- り開始する伐採範囲の確認と準備を行なう。
- 10月2日 小村・宮下の立ち合いのもとに、伐採作業を開始する。
- 10月3日 予想外に早く伐木作業が完了したので、伐採樹木の跡仕末ののち、地形測量にとりかかる。
- 10月4日 午前、小村、宇佐美、宮下にて地形測量を継続する。終了後、直ちに窯体確認のためのトレンチ設定を行なう。トレンチは、表採作業で比較的散布量の多い部分のうち、地形的にみて窯体の存在が想定される斜面傾斜の変ずる部分を選定して設けた。
- 10月5日 地形測量の補足を行なった後、トレンチの掘り下げを本格的に開始する。間もなく、焼土や灰に混って双耳瓶、坏、皿類破片の出土があった。
- 10月7日 表土除去とともに、トレンチ掘り下げ作業を継続し、灰層の広がり確認と窯体検出を急ぐ。灰層中からは窯壁片や焼土、須恵器などが検出されたが、窯体を確認することができなかった。また、斜面上方にトレンチを設定したが、何んの発見もなかった。
- 10月8日 灰層の広がりがほぼ確認されたので、本日よりの調査をこれに限定して行なうこととした。狭少な範囲より多量に遺物が出土する。短頸壺、長頸瓶、双耳瓶及び坏類が検出された。
- 10月9日 雨天のため野外作業を休止、出土遺物の整理を行なう。
- 10月11日 灰層の追求の結果、窯体の一部を検出したが、窯尻部だけが残存していた。6号窯の構築時に壊されたものと判明した。遺物は皿、坏、坏蓋及び双耳瓶が目立ったが、蓋の天井部上面に突帯をめぐらすものも検出されている。
- 10月12日 7号窯の窯残存部分の清掃とその下方を追求した。その結果、7号窯の焼成部が確認され、6号窯床面が検出された。さらにトレンチを南西側へ拡張したが遺構は検出されなかった。
- 10月14日 5号窯窯体の掘り下げを開始する。窯体は極めて浅い部分にあり、掘り下げ開始後、一部で早くも窯体を検出された。
- 10月15日 5号窯の掘り下げを続行する。窯尻部は表土下が窯底であり、遺存状態が極めて悪く、煙り出しは検出できなかった。
- 10月16日 焚口の埋土除去を行う。焚口から燃焼部にかけて天井が遺存していたが、灰原は圃場整備の際に削平されていた。午後、清掃を開始し、一部写真撮影を行なった。遺物は皿、坏及び坏蓋がわずかに窯底に残されていた。
- 10月17日 窯体の写真撮影ののち、実測作業を始める。
- 10月18日 窯体の実測作業を継続。県教委文化財保護課課長補佐中田宏策、同埋蔵文化財係長河崎与志雄氏が視察。
- 10月19日 雨天のため野外作業を休止し、遺物の整理と器材の点検を行なう。

- 10月20日 5号窯を残し、他所の埋め戻し作業を開始する。
- 10月21日 雨天のため作業休止。高畑調査団長、河崎県教委係長、平田県教委主事が現地視察、小村、宮下は調査状況を説明する。
- 10月25日 戸津古窯発掘調査委員会を開催する。
- 10月26日 連日の雨天のため埋め戻し作業が難行する。
- 10月27日 埋め戻し完了。器材を引き上げ、全調査日程を終了する。 (宮下幸夫)

註

- (1) 松任高等学校郷土クラブ「戸津古窯跡調査報告」昭和26年
- (2) 北陸大谷高等学校地歴クラブ「小松市戸津古窯遺跡発掘調査予報」【紀要】1号(昭和41年)
- (3) 吉岡康輔他「古代・中世における手工業—窯業・北陸」日本の考古学Ⅳ(昭和42年)
- (4) 小村 茂「二ツ梨一貫山古窯跡」小松市教育委員会(昭和45年)
- (5) 上野与一「南加賀に於ける信頼性への追試」古代学研究58号(昭和45年)
- (6) 小村 茂・上野与一「加賀古陶」日本考古学協会大会研究発表要旨(昭和47年)
- (7) 上野与一「窯跡」小松市史第4巻(昭和42年)

III 遺跡の位置と周辺の遺跡

南加賀平野は、矢田野町付近で東南に、白山前山地帯に深く谷を形成する。粟津温泉はこの谷の中程に位置している。遺跡はこの谷が西側に入り込む一支谷の中程南斜面に位置し、石川県小松市戸津町ヨの部、上田庄一氏所有の雑木林中に所在する。

国道8号線と粟津より那谷町を通して山代に至る道路にはさまれ、小松市林町より加賀市松山町まで低い丘陵が連なっている。この丘陵には古墳時代須恵器窯を上限とし、鎌倉時代瓷器窯を下限とする南加賀古窯跡群が形成されており、本窯が所在する戸津町とその周辺丘陵地帯は、奈良時代・平安時代の窯跡が集中している地域である。また、小松市南部の矢田野町から加賀市分校町にかけての平野部ないしはこれに面する丘陵上には、多くの古墳が点在している。なかでも、小松市の借屋古墳群や単独に分布する養輪塚古墳、念仏林古墳など、その副葬品の主体を占める須恵器が南加賀古窯跡群内で生産されたことはいうまでもない。しかし現在に至っても、いまだに該期の窯跡の存在が管見にふれたものはなく、未調査区の精査に期待したい。(宮下幸夫)

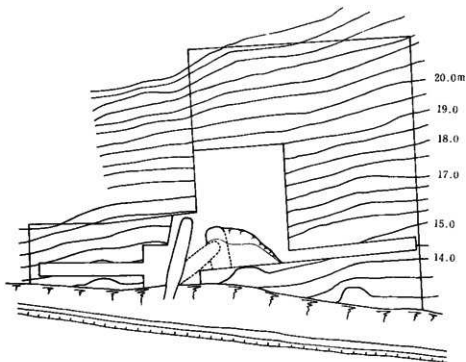


- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 戸津5号窯跡(平安) | 7 箱宮古窯跡群(奈良~中世) |
| 2 六字ヶ丘古窯址群(平安) | 8 那谷1号窯跡(鎌倉) |
| 4 一貫山古窯址群(奈良末~平安) | 9 小天王谷古窯址群(中世) |
| 3 豆圃山古窯址群 | 10 大天王谷古窯址群(鎌倉) |
| 5 ツツ梨古窯址群(飯林) | 11 カミヤ古窯址群(中世) |
| 6 奥谷1号窯跡(平安末~鎌倉前) | 12 分校古窯址群(古墳) |

第714 南加賀古窯跡群主要窯跡分布図

IV 窯体の構造

発掘調査で検出された窯跡は3基である。互いに切り合っているため、窯体の全容が明らかに出来た窯跡は、最終的に構築された戸津窯跡だけである。構築順序は、7号窯→6号窯→5号窯となるが、保存等を考慮したため、完掘を敷えて実施しなかった。したがって本章では戸津5号窯を中心に、その構造について述べることにする。

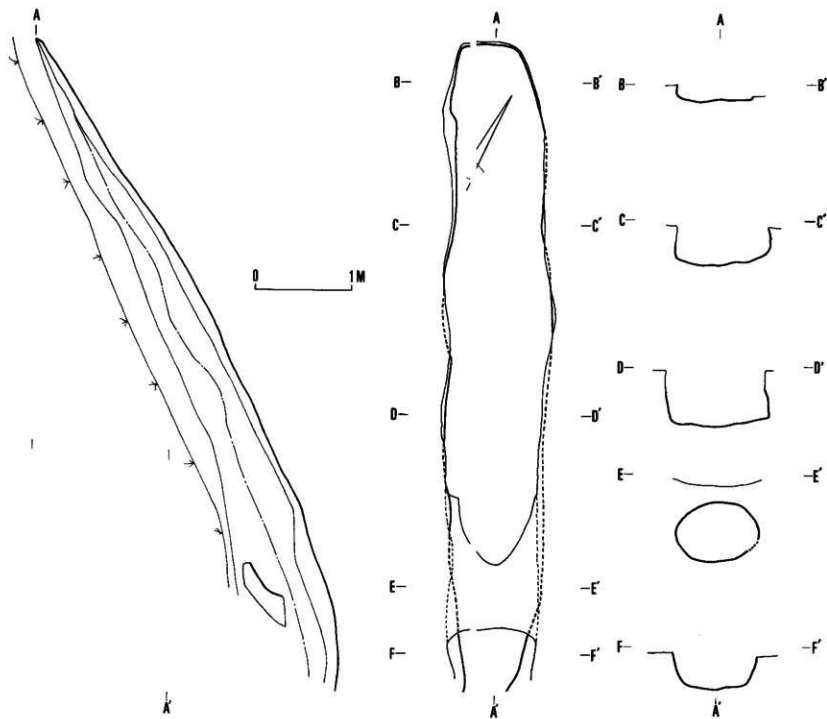


第8図 窯跡付近地形図

本窯跡は、南加賀古窯跡群北東ブロックの戸津地内古窯跡群に属する窯跡で、戸津3・4号窯跡の一丘陵東方に位置する。主軸方位はN-26-Eにとり、全長約6mを測る半地下式の形態に属する。灰原は圃場整備事業で既に破壊されており、煙道部は畑地化のための開墾で遺存状態が悪かった。幸いに、焚口より燃焼部にかけては天井及び側壁がほぼ完全な状態で検出できた。

(1) 焚口および燃焼部

焚口付近の遺存状態は良好で、側壁及び天井部は完全な状態で遺存していた。床面は前底部より約3度の勾配で緩く下降し、燃焼部で最も深くなり、約20度の勾配で焼成部へと続いている。焚口幅は床幅で約0.9m、高さ0.5mである。燃焼部より焚口付近にかけての床面に、僅かなが



第5图 尸津5号刺棘类刺图

ら舟底状に凹みが認められるが、他に目立った施設はみられない。

(2) 焼成部

床面傾斜角が変ずる焚口より約1mの地点で、一応燃焼部と区別する。床幅は燃焼部との境より約2mの地点で最大となり約1.2mを測る。床面傾斜はこの地点でやや勾配を増し、約25度で窯尻に続いている。窯上方での両側壁の遺存度は悪く、部分的には崩落していた。床面は還元化が認められるが、あまり強い状態ではない。

(3) 煙道部

煙道は築窯当初、地上に完全露呈していたと思われ、調査時には既に崩落していた。焼成部との区別は不明瞭であるが、ニッ梨一貫山1号窯跡の例のように、窯尻まで焼成品を窯詰するのが一般的に行なわれていたと考えられる。

(4) 前庭部及び灰原

前庭部及び灰原は、場整備で既に削平されており、口より約1mの前庭部を残すだけであった。

(5) 付属施設

5号窯跡東側に隣接して、焚口より一段高い位置に、地山を掘り削った平坦面が検出された。この平坦面は、地山を約30~65cm程度掘りくぼめた半楕円形の堅穴状遺構であるが、南側半分が削り取られているため、正確な規模等は不明である。平坦面全体に、焼土や灰とともに多量の須恵器片の堆積が認められたほか、南西隅において、白色粘土の堆積と砥石が出土している。

平坦面上面には、溝や柱穴などの内部施設もないところから、この平坦面の詳細な性格について検討することができないが、窯と密接な関係にある遺構であったと考えてよいであろう。ただ、土師器甕が1点発見されているが、平坦面の性格を明らかにする上で考慮する必要がある。

6号窯跡は主軸方位を東西にとり、5号窯と交叉する位置にある。焼成部中央をわずかに残すほかは消滅しており、全容を知ることができない。

7号窯跡は5号窯跡とほぼ平行に構築されているが、6号窯築窯時に大半が削平され、窯尻がわずかに残るだけであった。

以上、戸津5号窯跡の窯体を中心に述べてきたが、本窯は我々がこれまでに発掘調査を行なった須恵器窯のうちで最も小型であり、かつ最も浅く構築されていた。このことは須恵器工人内部の変化による労働力不足という推測もできる。又、須恵器工人を包括する政治的機構の崩壊の過程と密接にかかわりをもつのではないだろう。

(宮下幸夫)

V 遺 物

遺物は窯内出土の少量の坏・蓋類を除けば、他はすべてテラス状遺構（IV章では平坦面と呼称していた）床面及びその覆土中より出土したものである。器種としては、坏、台付坏、皿、盤、坏蓋と鉢、瓶、壺類に大別できる。以上の出土須恵器についての観察記録と計測値が別表にあるので参照していただきたい。本章では分類の基準の他、総括的な点について述べることにする。

(1) 蓋 類 (第11図1~16)

蓋類は総数16個体ある。そのうち、天井部外面に突帯をめぐらす14と壺蓋と思われる16をのぞき分類すると、まず、器形の大小により、口径17cm~13.5cmを有するグループをA類とし、B類は口径12cm以下のグループを一括した。A・B各類を形状により細分すると天井部から緩くカーブして口縁に至るタイプをI類、平坦な天井部を形づくるタイプをII類とすることができる。これらのいずれにも属しないものをC類とした。

A I類とした蓋は、口径16.3cmを最大とし、口径14.3cmを最低とするが、調整は天井部全体に回転ナデが施されており、A II類の蓋としたグループの製品の天井部に、回転ヘラ削り調整がみとめられる。B類としたものは、天井部が回転ヘラ削り調整されているため平坦であることと、口縁端が稍折せず、先ぼそりの素縁になる点がすべてに共通している。A、B類ともに紐の形状は同種である。

(2) 坏 類 (第11図17~36)

坏類は総数36個体ある。これを分類すると、A類としたものは口径13cm以上を計るものを一括した。B類は口径12.7cm以下の一群である。さらに器高指数23を基準に、基準器高指数以下をI類、それ以上をII類とする。I類は口径に比して器高が低いため扁平感がある。ちなみに、A類：B類は2.6：1、I類：II類は1：4であり、器形の大小が、器体の扁平度と無関係であることが指摘できる。

本類の製品にみられる調整は、左廻りロクロを使用したもので、底部に回転ヘラ削り調整を施したものが多く、巻き上げ痕をそのまま残すものもみられる。回転ナデ調整はすべてに共通している。

本類の総点数は79点あり、そのうち実測可能なもの36点を掲載した。

(3) 皿 類 (第11図37~43、第12図44~87)

実測可能な総個体数は51個体である。総点数は256点あるが、盤類との区別がつけ難いものが多く、ここでは大半を除外することにした。

器形の大小によって分類すると、口径15cm～口径16.8cmをA類とし、B類は、口径17cm～口径18.1cm、C類は口径13cm～13.3cmのグループである。C類は口径において坏類とあまりかわらないが、器高指数が小さいので本類に含んだ。

(4) 盤 類 (第12図88～93、第13図94～102)

本類は器形の大小や形態の差異により分類が不可能と考える。調整法においても坏類と大差ないものである。比較的規格化が安定した器種と考えたい。

(5) 台付杯 (第13図103～105)

最も出土数の少ない器種である。器形の大小による違いはあるが、手法上まったく同一である。

(6) 短頸壺 (第13図108～112)

短頸壺としたものに甗壺類が含まれるかもしれないが、短い口縁が直立するものを一括した。A I類は、胴部最大幅が上部にあり、比較的肩の張る器体をもつタイプであり、A II類としたものは、やや撫で肩になる。ともに立ち上り内面に指頭による圧痕を残すことや胎土が同一である点が共通する。B類としたものは、器形がやや大きく、胎土がA類とまったく異なっている。

(7) 肩 甗 壺 (第15図130・131)

A類は肩が張るもの、B類はやや撫で肩である。個体数が少なく、分類で詳細を区別することが困難である。

(8) 壺 類 (第14図126～128、第15図132～134)

A類としたものは1個体であり、器高に対して底部径が大きいため安定感がある。B類はA類を長胴化したものである。B類は胴部径、底径、高さの比率でさらにI・II・III類に分類できる。

(9) 長 胴 壺 (第14図129、第15図135)

所謂たこ形のプロポーションをもつもので、法量により、A、B類に分類した。成形、調整ともに壺類と共通する。

(10) 長頸瓶 (第13図113～115、第14図116～123)

胴肩部が屈折するものをA類、胴部が球状を呈するものをB類とする。B類はさらに胴部最大径が上方にあるもの、すなわち肩に張りのある器体をもつものをII類、球状胴部をもつものをI類に細分できる。いずれも底部切り難しが回転糸切りによるものである。また頸部については、筒状の頸部のものや口縁がラッパ状に大きく開くものなど様々であり、特に胴部との関係におい

て規則性が認められない。

(11) 双耳瓶 (第15図 136~140)

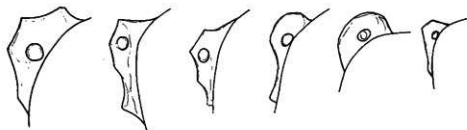
双耳瓶は合計5個体あった。いずれもプロポーションや大きさが異なるものであり、一応それぞれ分類した。把手の形状については、下図を参照していただきたい。これも分類すると一個体I類になるほど多様である。

(12) 丸底壺 (第16図 141~145)

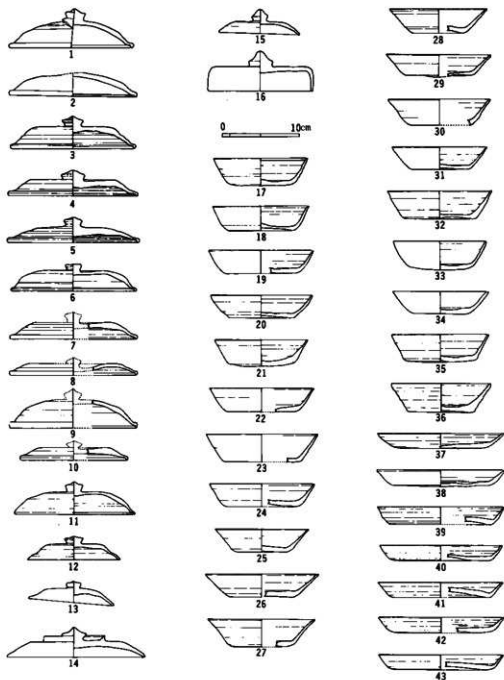
長胴形を呈するものをA類、胴部が球状をもつものをB類とした。

以上、各器種の分類方法を簡単に述べたが、個々の計測や形態、手法、焼成等については別表に記載した。

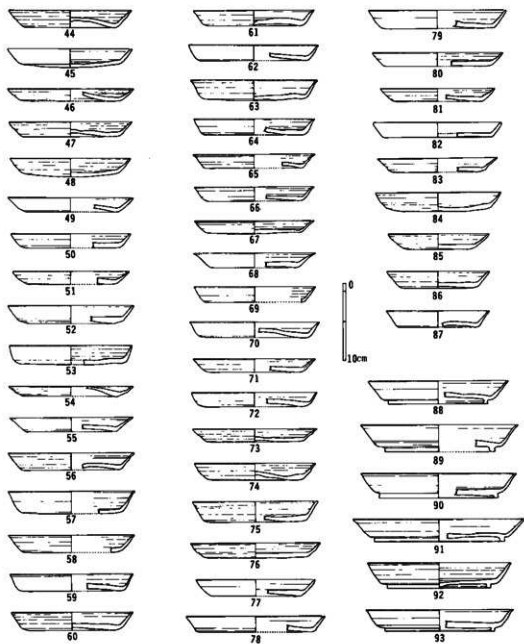
ここにおいて、分類した基準はいずれも大系的に確立されているものではなく、まったくの主観であって、読者諸氏にはさまざまな異論があることと思う。したがって別表は客観的な資料として活用願いたい。



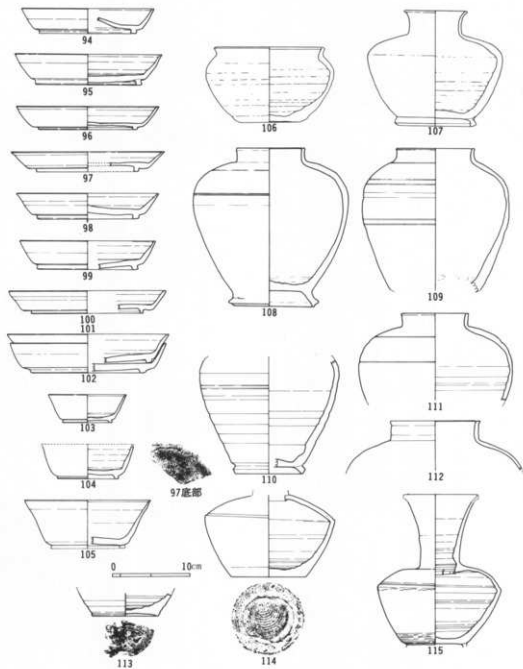
第10図 双耳瓶把手実測図



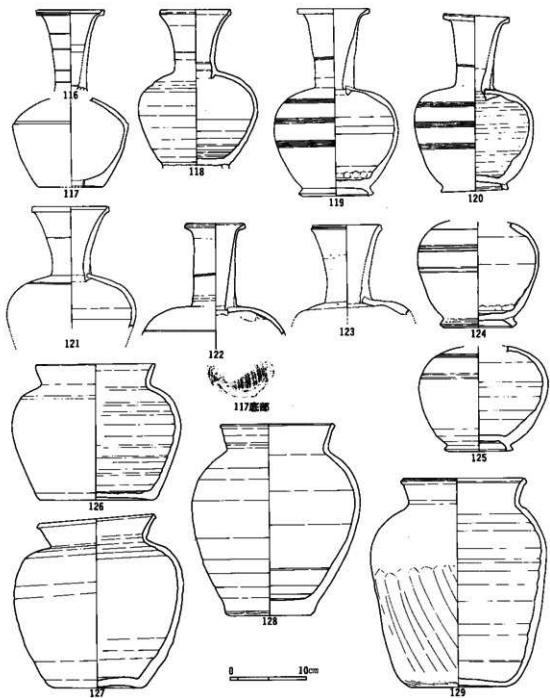
第11图 铜器实测图



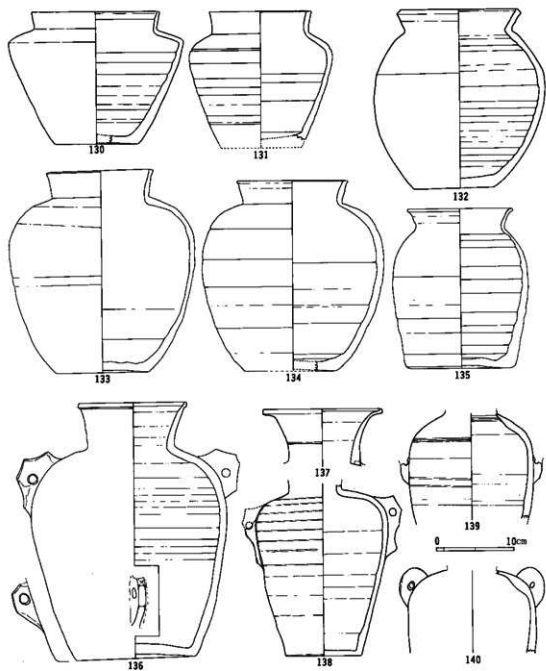
第12圖 瓚 惠 器 実 測 図



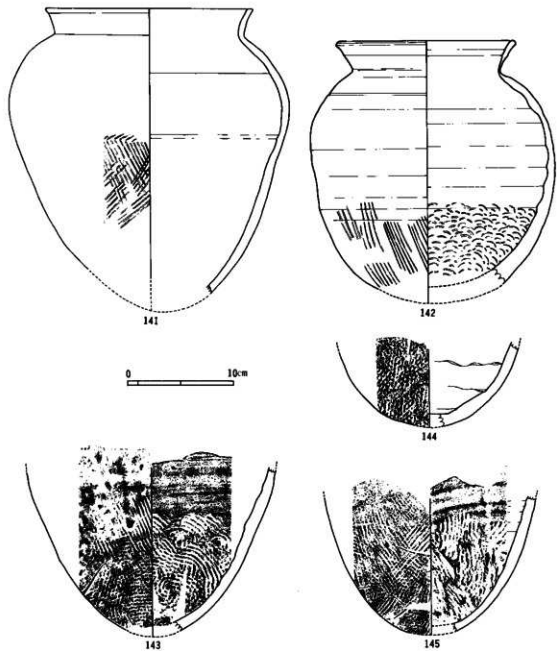
第13图 瓠忠器类图



第14组 须惠器实测图



第15图 须惠器实测图



第16图 填志器实测图

1. 出土須恵器の観察

種別分類	図番	形態の特徴	手法の特徴	備考
A.I	11-1	鈕より緩く下降する器体は肩部で明瞭な絞をなさず、口縁において段を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形全体を指ナデ調整	焼成 良好、胎土 精良 色調 内・外黒灰色 ロクロ回転 左 5号窯床出土
	2	天井部から緩く下降し、小さな三角形の口縁端をつくる。	マキアゲ、ミズビキ成形指ナデ調整入念	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内・外淡黄色
	9	天井部から緩く下降し、外展して口縁部に至る。口縁端部はわずかに内傾する。鈕を欠く。	マキアゲ、ミズビキ成形口縁端部内・外面及び天井部は指ナデ	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内淡灰色 ロクロ回転 左 焼ゆがみ激
	11	やや平坦な天井部から丸く口縁部に至る。口縁部内面に段を有する。小さな口縁部はほぼ直立する。	マキアゲ、ミズビキ成形	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 淡灰色 ロクロ回転 左
	3	平坦な天井部に、明瞭な肩をもち、口縁端部がわずかに内傾する。	マキアゲ、ミズビキ成形天井部外面をへら削り調整し他は指ナデ。内・外面ともにミズビキ痕を残す。鈕は指ナデ仕上げ。	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内暗灰青色 ロクロ回転 左
A.II	4	平坦な天井部から下降する器体を屈折して口縁部に至る。口縁端部を丸く小さく仕上げている。比較的大きな鈕をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形天井部外面をへら削り調整。他は指によるナデ調整。	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内暗灰青色 ロクロ回転 左
	5	天井部から緩く下降し、屈曲の少ない口縁部を形作る。口縁端部はやや大きい。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面ともにミズビキ痕を明瞭に残す。仕上げ調整は不十分	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内黒灰色 外黒灰色 ロクロ回転 左 降灰極多 不明
	6	狭い天井部から丸く口縁部に至る口縁端部は三角形を呈する。突起のない鈕をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面をへら削り調整。他は指による横ナデ調整。	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内・外灰青色 ロクロ回転 左
	7	平坦な天井部から緩く、三角形の口縁端部に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部はへら削りの後に指ナデ調整している。	焼成 良好、胎土 砂粒含む 色調 内・外灰青色 ロクロ回転 左 天井部の一部及び鈕を欠く
	8	焼きあみが著しい。口縁端部は器体に比して大きく、三角形に仕上げている。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部はへら削り調整。その他指ナデ調整	焼成 良好、胎土 不良 色調 内灰紫色 外灰青色 ロクロ回転 左 鈕を欠く
B.II	10	口縁部の屈折は少く、口縁端部は直立する。肩部はやや丸く絞をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形天井部はへら削り調整	焼成 不良、胎土 精良 色調 内・外淡黄色 内面に淡緑色の自然釉が付着 鈕を欠く
	12	平坦な天井部に先はそりの口縁部を形成する。	マキアゲ、ミズビキ成形天井部はへら削り調整。他は入念に指ナデされている。	焼成 良好、胎土 砂粒多含 色調 内・外暗灰青色 ロクロ回転 右
	13	肩部の絞は丸く不明瞭。やや扁平な鈕をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形天井部はへら削り調整。鈕もへら削り調整。指ナデ調整入念。	焼成 良好、胎土 精良 色調 内・外淡黄色
	15	肩部は絞をなし、やや不明瞭な天井部から直線的に口縁に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形全体に指ナデ調整入念	焼成 良好、胎土 精良 色調 内・外淡黄色 104に融着

種別	分類	図版	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	C	14	肩がはって口縁先端がなだらかに伸びる。扁平な天井部、高さ 0.6cm 凸帯をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。凸帯貼り付け。天井部へラ削り調整。最終的に入念な指ナデ調整	焼成 良好、胎土 堅緻 色調 内、外淡黄色
素甕		16	平坦な天井部から屈折して垂直な口縁部を形作る。	マキアゲ、ミズビキ成形。内面は指ナデ調整入念	焼成 不良、胎土 精良 色調 内淡黄色、外面に淡緑色の自然降灰物が全体に付着している。
環	A. I	11-19	底部よりやや丸く立ち上り、口縁部に至って直線的に口縁端部に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部回転へラ削り調整。内面にミズビキ痕を残す。全体に回転ナデ入念。	焼成 良好、胎土 不良 色調 内濃灰色 外、黒灰色 ロクロ回転 左
		20	器体半ばで屈折して、口縁部に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好、胎土 精良 色調 内濃灰色 外黒灰色 ロクロ回転 左
		22	底部より直線的に口縁部に至り薄く仕上げている。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整	焼成 良好、胎土 砂粒含 色調 内灰青色 外黄灰色 ロクロ回転 左
		24	底部より直線的に口縁部に至る	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整	焼成 良好、胎土 精良 色調 内・外灰青色 ロクロ回転 左
		26	底部より直線的に口縁部に至るが、外傾度が強い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整。他は回転ナデ調整	焼成 良好、胎土 砂粒多含 色調 内・外黒灰色
		29	口縁端が薄く丸い。外傾度が強い。立ち上りで短く屈折する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整入念	焼成 良好、胎土 精良 色調 暗灰黄色 左 ロクロ回転 左
		30	口縁端部に至ってわずかに外反する。器壁不均一。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、へラ削り調整。他は回転ナデ調整。	焼成 不良、胎土 精良 色調 内・外淡黄色 ロクロ回転 左
	A. II	23	立ち上りから口縁部にかけてわずかに外反する。口縁端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部の回転ナラ削り調整。口縁端部の回転ナデ調整入念。	焼成 良好、胎土 精良 色調 内・外灰青色 ロクロ回転 左
		27	立ち上りから口縁部にかけて緩く外反する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、へラ削り調整。他は回転ナデ調整。	焼成 良好、胎土 精良 色調 内・外灰青色 ロクロ回転 左
		32	立上りは厚く、口縁端より 1cm 位のところより薄く外反する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整。回転ナデ調整入念。	焼成 不良、胎土 砂粒含 色調 内・外黄褐色 器壁脆い
B. II	17	底部との境が丸く不明瞭。直線的に口縁端部に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整。口縁部の回転ナデ入念	焼成 普通、胎土 精良 色調 青灰色 ロクロ回転 左	
	18	口縁先端が外反する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部回転へラ削り調整。	焼成 良好、胎土 砂粒含 色調 暗灰色 降灰物が全体に付着	
	21	立ち上りが丸く、稜をなさない。口縁先端部のみ薄く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、へラ削り調整。他は回転ナデ調整。	焼成 不良、胎土 砂粒含 色調 灰白色 ロクロ回転 左	
	25	底部より直線的に上る器壁は口縁部で極めて薄くなり、口縁端部を丸く仕上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、回転へラ削り調整。回転ナデ調整入念。	焼成 良好、胎土 砂粒多含 色調 灰青色 口縁部にキ裂あり	
	28	底部より直線的に口縁に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部、へラ削り調整。	焼成 良好、胎土 砂粒含 色調 濃灰色 ロクロ回転 左	

種別	分類	図	版	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	B. II		31	立ち上りから薄く直線的に口縁に至る。	マキアゲ、ミズビキ成形。	焼成 良好、胎土 精良 色調 内灰青色 外灰色 外面に降灰軸付着
			33	心もち内考ぎみに立ち上る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整入念 他は回転ナゲ入念。	焼成 良好、胎土 精良 色調 灰白色
			34	器壁が厚く、口縁端を丸く仕上げ上げる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部には部分的に指ナゲを施す。	焼成 良好、胎土 砂粒少含 色調 灰青色 重ね焼きの痕跡がある
			35	立ち上りより直線的に口縁に至る。底部は厚い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。他は回転ナゲ入念。	焼成 不良、胎土 精良 色調 暗青色 ロクロ回転 左
			36	底部との境に明確な稜をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、へう削り調整。内面は回転ナゲ調整入念。	焼成 良好、胎土 砂粒含 色調 青灰色 ロクロ回転 左
			盤			12-88
89	器壁は比較的薄く、口縁端部で外反し、丸く仕上げ上げる。高台はやや外傾して安定がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整				焼成 良好、胎土 精良 色調 内 灰青色 ロクロ回転 左
90	立ち上りは丸く稜をなさない。口縁部は緩く外反する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り後、回転ナゲ調整している。				焼成 良好、胎土 砂粒多含 色調 淡灰青色 ロクロ回転 左
91	口縁端部が外方に屈折する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。 その他、回転ナゲ入念。				焼成 良好、厚紙 胎土 不良 色調 灰色
92	口縁は先端で緩く外反し、先はそりの端部をつくる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。				焼成 良好、胎土 砂粒含 色調 灰青色
93	立ち上りは丸く、稜は不明瞭であるが、口縁端が鋭く外反する。小さな高台を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。 外面にミズビキ痕を残す。				焼成 良好、胎土 砂粒多含 色調 黄灰色 内面に降灰軸付着
13-94	口縁端は丸く、立ち上りから直線的に口縁に至る。焼き込みが激しい。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。				焼成 普通 胎土 砂粒含 色調 黒紫色
95	器壁は厚く、口縁部が外反する。大きな高台を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整後、さらに回転ナゲ調整を中心部に施している。				焼成 良好、厚紙、胎土、精良 色調 淡黄灰色 ロクロ回転 左 底部に「ノ」へう記号を有する。
96	口縁部内面を丸く仕上げ、先はそりの口縁端を形作る。扁平な高台をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。				焼成 良好、胎土 粗悪 色調 内黒灰色 外淡灰色 内外面とも降灰軸付着
97	立ち上りは丸く、稜をなさない。口縁端まで直線的に形作る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、入念な回転ナゲ調整。				焼成 良好、胎土 精良 色調 黒灰色 ロクロ回転 左 底部に文字状の刻文がある
98	器壁が極めて厚く、口縁端を丸く仕上げ上げる。高台も安定感がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、外周を回転へう削り調整。その他回転ナゲ調整入念。				焼成 良好、胎土 不良 色調 濃灰色
99	口縁がわずかに内屈する。高台は外傾している。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部、回転へう削り調整。				焼成 良好、胎土 砂粒含 色調 淡黄灰色 ロクロ回転 左

種別分類	図版	形態の特徴	手法の特徴	備考
盤	100	口縁はやや厚く、端部は丸味をもっている。高台より横へ長く伸びて立ち上る。小さな高台を有する。	マキアグ、ミズビキ成形。底部、回転へう削り調整。	焼成色調 良好。胎土 淡黄灰色 精良
	101	口縁が全体的に外反する。	マキアグ、ミズビキ成形。	焼成色調 良好。胎土 淡灰色 102と融着 精良
	102	器壁が厚く、口縁端は丸く仕上げている。扁平な高台をもっている。	マキアグ、ミズビキ成形。底部、回転ナデ入念。	焼成色調 良好。胎土 灰青色 101と融着 精良
台付	A B-103	小さく外展する高台から立ち上る器体が、口縁端が外反する。	マキアグ、ミズビキ成形。底部、高台、回転へう削り調整。入念な回転ナデ調整。	焼成色調 良好。堅緻。胎土 暗灰色 回転 左 精良
	B 104	口縁端欠損。底部の境は丸く接をなさない。	マキアグ、ミズビキ成形。底部、回転へう削り調整。他は回転ナデ入念。	焼成色調 不良。胎土 砂粒含 15に融着 淡灰色
坏	C 105	高台欠損。底径に比して口径が大きいため安定感を欠く。口縁端がわずかに外反する。	マキアグ、ミズビキ成形。底部、回転へう削り調整。他は回転ナデ。	焼成色調 良好。胎土 黄灰色 回転 左 精良
鉢	13-106	底部から緩く外反する器体が写程で最大径となり、頸部から口縁部にかけての字状を呈する。口縁端に稜をもつ。	マキアグ、ミズビキ成形。底部、へう削り、ナデ調整。内面に、マキアグ、ミズビキ痕を残す。口縁内外とも入念に回転ナデ調整。	焼成色調 不良。胎土 砂粒少含 肩部に淡緑色の降灰釉付着 黄白色
小壺	13-107	比較的強い強い肩部をもつ。幅広い肩部から伸びる器体は頸部でまっ直立しながら、口縁部に至ってゆるく外反する。口縁端を丸くつまみ揃えてしている。外展する高台を有する。	マキアグ、ミズビキ成形。体部下方に回転へう削り調整。口縁から肩にかけて入念な回転ナデ調整。底部回転へう削り、肩部で接合している。	焼成色調 良好。堅緻。胎土 青灰色 回転 左 精良
短頸	A. I 13-108	外方へ強く張り出す高台から緩く垂直して伸びる器体は頸部でまっ直立に立上る。口縁部上端のナデのため、内外に向ってわずかにほりだす。胴部最大径付近に2条、肩部に1条の沈線をめぐる。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面とも入念な回転ナデ調整。底部内面にミズビキ痕を残す。	焼成色調 不良。胎土 茶黄色 回転 左 沈線は1回転半しているため実測図では2条になっている。
	111	108と同様。体部に2条の沈線を有する。体部下欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。	焼成色調 不良。胎土 茶黄色 精良
壺	A. II 109	B類に比してやや横で斜になる。口径はやや大きくなるがプローションは近似している。体部に5条の沈線を有する。底部以下欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面とも入念な回転ナデ調整。立上り内面に指頭による圧痕がある。内面にミズビキ痕をわずかに残している。	焼成色調 不良。胎土 茶白色-茶黄色 回転 左 精良
	110	肩部以上を欠く。外展する角張った高台を有する。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面ともミズビキ痕をとどめるが、その上に入念な回転ナデ調整を施す。立ち上り内面の指頭圧痕も入念に磨消されている。	焼成色調 不良。胎土 茶白色 回転 左 精良
	B 112	胴部以下欠損。頸部が直立し、口縁端は調整により強く外展する。	マキアグ、ミズビキ成形。器体を薄く仕上げる。回転ナデ調整入念。頸部に胎土縁の凹凸を残す。	焼成色調 良好。胎土 青灰色 全面に降灰釉付着 精良

種別	分類	図版	形態の特徴	手法の特徴	備考
肩	A	15-130	高台は欠損している。口縁はわずかに外傾し、端部を丸く仕上げる。へたりのため実際より肩の張り強い。	マキアグ、ミズビキ成形。体部外面、縦のヘラナデ調整。立ち上り約4.5cmを入念に回転ナデ調整。体部内面にミズビキ痕を残す。	焼成 良好 堅緻。胎土 精良 色調 青灰白色。 肩に降灰種付着 ロクロ回転 左
		B	131	撫で肩で、頸部がわずかに外傾する。口縁上端は比較的幅広く作られる。肩に太い沈線をもつ。底部は欠損する。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面ともにミズビキ痕を残す。頸部上半内外面ともに回転ナデ調整入念。
壺	A	14-126	胴部最大径(22cm)に対して器高が低いので安定感がある。撫で肩で頸部はくの字状に外傾し、口縁端は丸い。	マキアグ、ミズビキ成形。全体に回転ナデ入念。底部に揮痕がある。器体内面にミズビキ痕を残す。	焼成 良好 堅緻 胎土 精良 色調 細砂粒をわずか含む 外淡青灰色 内暗灰色 ロクロ回転 左
		127	A類よりやや器高が増す。口縁端が内外両面に張り出す。外傾する口縁帯をもつ。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面ともに回転ナデ調整入念。	焼成 良好 胎土 精良 色調 細砂粒やや多い 暗灰色 濃緑色の自然釉付着
	B.I	128	胴部最大幅(22cm)が器体の外にあり、口縁帯が外傾し、内側に調整時に生ずる張り出しをもつ。	マキアグ、ミズビキ成形。底部ハリツツ。立ち上り6cmに右斜めの揮痕がある。肩部に粗い回転ナデ調整。その他入念な回転ナデ調整。	焼成 良好 胎土 砂粒多くやや粗 色調 黄灰色 ロクロ回転 左
		133	撫で肩で、体部は全体的に丸い。口縁端は、つまんで調整しているため、上面がへこんでいる。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面ともにミズビキ痕をとどめるが、回転ナデにより入念に調整している。体部下部下を右斜めにへら撫でする。	焼成 良好 胎土 砂粒が多く粗い。器表に微小穴をもつ 色調 青灰色 ロクロ回転 左
		134	体部が球状をなす。口縁端は水平で、外展する張り出しをもつ。	マキアグ、ミズビキ成形。回転ナデ入念。立ち上り部分にへら撫で。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 砂粒が多い 青灰色
	B.II	15-132	胴部が球状を呈し、底部が小さいので安定性を欠く。頸部は強く外傾する。	マキアグ、ミズビキ成形。立ち上りより13cmをへら撫でする。内面にミズビキ痕を残すが、全体に回転ナデ入念。	焼成 良好 胎土 砂粒多くやや粗 色調 黄灰色 全体自然釉が覆っている。 ロクロ回転 左
長	A	14-129	胴部が長胴形を呈し、底部との境に接が明瞭でない。頸部は緩く外反する。口縁帯に調整時の四角がある。	マキアグ、ミズビキ成形。胴部下半をへらケズリし、その上及び内面を縦に指ナデしている。肩部及び頸部内面を回転ナデ調整。底部指ナデ調整。	焼成 不良 胎土 砂粒多く粗 色調 暗灰色 ロクロ回転 左
		B	15-135	所謂タコツボ形の器形である。口縁は外反し、丸く仕上げる。	マキアグ、ミズビキ成形。内外面ともにミズビキ痕をとどめる。回転ナデ調整粗い。底部は未調整。
丸	A	16-141	底部欠損。長胴形の丸底壺である。口縁はゆるく外傾し、口縁上端に幅広い面をもつ。	マキアグ、ミズビキ成形。胴下半に多方向のタタキを加える。肩外部面及び内面は入念にへら削りした後、回転ナデ調整。	焼成 良好、堅緻 胎土 砂粒多くやや粗い 色調 青灰色 ロクロ回転 左
		143	体部上半及び底部先端欠損。	マキアグ、ミズビキ成形。底部外面に多方向の金線状タタキ、内面に同心円状タタキを残す。体部下半より上方を回転へら削り調整。	焼成 良好、堅緻 胎土 精良 色調 青灰色、部分的に灰白色 ロクロ回転 左

種別	分類	図 版	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
九 底 壺	A	16-144	底部付近の破片であり、立ち上り方角にやや不安がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面に糸織状のタタキをもつが、内面は未調整。	焼成胎土色調 良好 精良 青灰色
		145	体部上半部が欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面に糸織状のタタキ、内面に同心円状のタタキをもつ。体部内面にミズビキ痕を残す。	焼成胎土色調 良好、堅緻 精良 内灰色 外青灰色
	B	142	球状の胴部から伸びる頸部は鋭く外傾し、口縁端を丸く仕上げ。底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。胴部外面下半に縦の糸織状タタキ、内面に同心円状のタタキをもつ。体部内外面とも入念に回転へう削り調整。頸部口縁部肩部の回転ナデ調整入念。	焼成胎土色調 不良 砂粒多く粗い。 内黄灰色 外黄褐色 外面に自然釉付着 ロクロ回転 左
長 頸	A	13-113	高台及び胴上半部を欠損	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面ともミズビキ痕を残すが回転ナデ調整入念。底部、回転糸切り。	焼成胎土色調 不良 精良 黄灰色 ロクロ回転 左
		114	高台及び頸部を欠損。ゆるく立ち上る器体は肩で折り返すため明瞭な線をもち、内面は弧をえがいて立ち上る肩に指頭によるへこみを生じている。	マキアゲ、ミズビキ成形。外面は入念に回転ナデ調整するが、内面にミズビキ痕を残す。底部、回転糸切り。	焼成胎土色調 普通 砂粒多く粗 青灰色 左 ロクロ回転
		115	肩部の折り返しがややゆるく、肩部面がふくらんでいる。頸部は緩く外反する。口縁及び高台欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。立ち上り 1.5cmを回転へう削り調整。肩部付近未調整。他は回転ナデ調整。底部へう調整。	焼成胎土色調 良好 砂粒多く粗 青灰色 左 ロクロ回転
	B	14-116	頸部はゆるく外反し、口縁部に至り、強く外反しながら張り出す。口縁は丸く外展する。4条の沈線をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。全体に回転ナデ調整後、頸部に左斜めの指頭ナデを施す。	焼成胎土色調 やや不良 砂粒多いが精良 ロクロ回転 左
		117	ゆるく立ち上る器体が肩部で反転する形状を呈する。肩に指頭沈線をもつ。高台欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。全体に回転ナデ入念。特に内部が入念。底部、回転糸切り。	焼成胎土色調 やや不良 砂粒多いが精良 ロクロ回転 左
		118	球状の胴部から伸びる頸部は鋭く大きく外反し、口縁部は先ばそりに直立する。高台欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。立ち上り 2cm及び肩部を回転へう削り調整。他は回転ナデ調整。底部へう削り調整。	焼成胎土色調 普通 やや不良 砂粒多く粗 青灰色 左 ロクロ回転
		119	球状の胴部から伸びる頸部はわずかに外傾し、口縁が横へ張り出す。頸部中央に2条、胴部に2-3条を1組とした沈線が3段に施されている。高台は外展している。	マキアゲ、ミズビキ成形。立ち上り内面に指頭による圧痕を残す。全体に回転ナデ調整入念。	焼成胎土色調 良好、堅緻 精良 黄灰色 ロクロ回転 左 頸部接合部分を補強しているため厚い。
A	124	頸部以上欠損。球状の胴部に3段に糸織を施す。強く外展する高台をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。内面に指頭圧痕がある。回転ナデ調整入念。	焼成胎土色調 やや不良 精良。脆い 黄灰色	
	125	球状の胴部に2段の数条の沈線をもつ。頸部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面とも入念に回転ナデ調整。	焼成胎土色調 やや不良 精良 黄灰色	
B II	120	肩の張った体部から伸びる頸部はわずかに外傾し、口縁部は横に張り出す。高台は小さく、外展する。頸部に2条、体部には3段に数条の沈線をめぐらしている。	マキアゲ、ミズビキ成形。内面にミズビキ痕をとどめるが、全体に入念な回転ナデ調整。	焼成胎土色調 良好 やや粗 砂粒を多く含む 青灰色 左 ロクロ回転	

種別	分類	図版	形態の特徴	手法の特徴	備考		
瓶	長頸	BII	121	体部下半を欠く。頸部は大きく外反し、先ぼそりの口縁は直立する。頸部中央に1条の沈線がめぐる。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部内外面と頸部接合部の回転ナデ調整入念。	焼成 胎土 色調 普通 砂粒多くやや粗 青白色	
			122	張りの強い肩部に筒状の頸部をもつ。口縁は張り出し、先ぼそりに直立する。頸部に2条の沈線。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部内面に指頭痕を残すが、全体に回転ナデ調整。	焼成 胎土 色調 やや不良 砂粒多く粗 青白色	
			123	外傾する頸部は器厚を減することなく口縁端に至る。口縁端外面につまみナデによるへこみを生じている。	マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整入念。	焼成 胎土 色調 良好 砂粒多くやや粗 青灰色 ロクロ回転 左	
双耳	耳	A	15-136	撫で肩で、頸部は外傾し、直線的に口縁に至る。胴部下半に耳形把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。内面にミズビキ痕を残す。全体に回転ナデ調整入念。	焼成 胎土 色調 良好、堅緻 精良 灰白色 同種のものが他に1点ある。	
			B	137	肩部下半欠損。大きく外反する頸部に、先ぼそりの三角形に近い口縁端をもつ。頸部に1条の沈線をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面ともに回転ナデ調整。頸部外面に縦位の擦痕がある。	焼成 胎土 色調 良好、堅緻 砂粒多く粗 茶白色
			C	138	肩の張りが強く、長胴の体部をもつ。頸部上部が欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面ともに入念な回転ナデ調整。	焼成 胎土 色調 良好 砂粒多く粗 ロクロ回転 左
瓶	短頸	D	D I	139	撫で肩で筒状の胴部を呈する。把手上半、底部、頸部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面とも回転ナデ調整。	焼成 胎土 色調 不良 精良 黒灰色
			D II	140	D I類に比して肩の張りが強いが、より筒状に近い胴部をもつ。胴部下半及び頸部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面とも回転ナデ調整。	焼成 胎土 色調 不良 砂粒多く粗 黄灰色 ロクロ回転 左

2. 出土須臾器の計測

量類計測値 (単位 cm)

△—残存長 ×—計測不能

分類	番号	口 径	器 高	備 考	分類	番号	口 径	器 高	備 考
A I	1	16.0	5.1		A II	7	16.3	△ 2.2	銚 欠
	2	14.3	△ 3.1	銚 欠		8	16.3	△ 1.5	銚 欠
	9	16.3	△ 3.6	銚 欠		10	13.7	△ 1.7	銚 欠
	11	15.4	4.3			12	11.9	3.1	
A II	3	15.8	4.3		B II	13	11.0	2.8	
	4	16.2	3.3			15	10.4	3.2	
	5	16.9	3.3		C	14	17.8	3.9	凸帯高 0.7
	6	16.0	3.5			16	13.5	6.2	

坏類計測値 (単位 cm)

分類	番号	口 径	器 高	器高指数	外 傾 度	分類	番号	口 径	器 高	器高指数	外 傾 度
A I	19	13.7	3.0	21.9	55	B II	17	12.2	3.1	25.4	61
	20	13.3	3.0	22.6	40		18	12.5	3.2	25.6	64
	22	13.6	3.1	22.8	58		21	12.1	3.5	28.9	55
	24	13.7	3.0	21.9	52		25	12.2	3.0	24.6	48
	26	14.7	3.0	20.4	43		28	12.5	3.2	25.6	48
	29	13.4	3.0	22.4	52		31	12.1	3.0	24.8	50
	30	13.0	3.4	22.9	52		33	11.8	3.8	32.2	63
A II	23	14.6	3.7	25.3	54		34	12.2	2.9	23.8	52
	27	13.9	3.6	25.9	53		35	12.4	3.2	25.8	59
	32	13.3	3.7	27.8	55		36	12.7	3.7	29.1	53

量計測値 (単位 cm)

分類	番号	口 径	器 高	器高指数	外 傾 度
A	37	16.0	2.0	12.5	42
	38	16.3	2.2	13.6	47
	39	16.2	2.3	14.2	56
	40	15.5	2.0	12.9	52
	41	15.9	2.0	12.6	50
	42	15.9	2.1	13.2	49
	43	15.9	2.0	12.6	53
	44	15.9	2.3	14.5	46
	45	16.0	2.5	15.6	50
	46	16.3	1.7	10.4	40
	47	15.8	2.0	12.7	47
	48	15.5	2.4	15.5	46
	49	16.2	1.9	11.7	38
	50	15.5	1.9	12.3	47
	51	15.0	1.7	11.3	35
	52	16.2	2.4	14.8	50
	53	15.9	2.5	15.7	66
	54	16.0	1.3	8.1	×
	55	15.9	1.9	11.9	36
	56	16.3	2.3	14.1	46
	57	16.3	2.9	17.8	60
	58	16.3	2.3	14.1	47
	59	15.9	2.3	14.5	59
	60	15.6	2.4	15.4	62
	61	15.8	2.0	12.7	52
	63	16.5	2.7	16.4	57

分類	番号	口 径	器 高	器高指数	外 傾 度	
A	64	15.8	2.1	13.3	54	
	65	16.0	1.8	11.3	46	
	66	15.7	1.9	12.1	49	
	67	15.7	1.7	10.8	40	
	68	16.0	1.9	11.9	37	
	69	16.0	2.0	12.5	47	
	70	16.0	2.0	12.5	51	
	71	16.5	1.7	10.3	39	
	72	16.3	1.9	11.7	56	
	73	15.8	1.7	10.8	35	
	74	16.3	2.2	13.5	44	
	76	15.6	2.0	12.8	40	
	79	16.7	2.4	14.4	51	
	80	16.8	1.8	10.7	44	
	81	16.5	1.7	10.3	39	
	82	15.5	2.0	12.9	53	
	83	16.2	1.9	11.7	40	
	84	16.1	2.5	15.5	49	
	B	62	17.0	2.1	12.4	51
		75	16.9	2.7	16.0	57
77		18.1	2.2	12.2	43	
78		17.8	2.2	12.4	49	
C	85	13.0	2.1	16.2	40	
	86	13.2	2.2	16.7	49	
	87	13.3	2.1	15.8	53	

盤類計測値 (単位 cm)

分類	番号	口径	器高	器高指数	外傾度
	86	18.1	3.0	16.6	47
	89	20.2	3.5	17.3	54
	90	20.0	3.2	16.0	55
	91	22.3	3.0	13.5	45
	92	18.6	3.3	17.7	52
	93	19.0	2.9	15.3	53
	94	17.1	3.3	19.3	57
	95	19.0	4.0	21.1	51

分類	番号	口径	器高	器高指数	外傾度
	96	18.4	3.1	16.8	52
	97	19.8	2.6	13.1	44
	98	18.3	3.4	18.6	49
	99	17.5	3.8	21.7	56
	100	20.2	3.0	14.9	52
	101	20.8	3.8	18.3	59
	102	20.1	3.9	19.4	63

台付環類計測値 (単位 cm)

分類	番号	口径	器高	器高指数	外傾度
A	103	10.0	6.4	64.0	63
B	104	△11.9	△4.6		68

分類	番号	口径	器高	器高指数	外傾度
C	105	16.2	△3.7		61

鉢類計測値 (単位 cm)

分類	番号	口径	器高	底径	備考
	106	14.5	10.0	7.7	

小壺類計測値

分類	番号	口径	器高	底径	備考
	107	7.8	15.1	10.4	

短頸壺計測値 (単位 cm)

分類	番号	口径	器高	底径	備考
A I	108	9.0	21.0	10.5	
	111	8.6	×	×	底部欠
	110	×	×	8.7	口縁部欠

分類	番号	口径	器高	底径	備考
B	109	10.1	×	×	底部欠
	112	11.4	×	×	底部欠

肩衝壺計測値 (単位 cm)

分類	番号	口径	器高	底径	備考
A	130	16.7	△17.3	△10.8	高台欠

分類	番号	口径	器高	底径	備考
B	131	13.5	×	×	底部欠

壺類計測値 (単位 cm)

分類	番号	口 径		器 高	底 径	備 考
		胴 部 径	口 径			
A	126	15.5	17.9	15.0		
		22.0				
B I	127	14.8	22.4	11.2		
		22.0				
	128	14.6	25.1	10.6		
22.2						

分類	番号	口 径		口 径	底 径	備 考
		胴 部 径	口 径			
B II	133	13.9	26.5	12.0		
		24.2				
	134	14.6	25.0	11.8		
23.9						
132	15.0	23.5	10.2			
	22.0					

長胴壺計測値 (単位 cm)

分類	番号	口 径		器 高	底 径	備 考
		胴 部 径	口 径			
A	129	15.7	27.5	12.2		
		22.8				

分類	番号	口 径		器 高	底 径	備 考
		胴 部 径	口 径			
B	135	13.6	21.0	12.8		
		17.4				

長頸壺計測値 (単位 cm)

分類	番号	口 径	胴 部 径	器 高	底 径	備 考
A	113	×	×	×	△ 8.5	
	114	×	16.9	×	△ 9.7	
	115	×	15.7	×	△ 7.8	
	116	8.5	×	×	×	
	117	×	15.0	×	△ 8.4	
B I	118	9.0	15.6	△20.3	△ 8.7	
	119	9.3	16.4	24.6	8.5	

分類	番号	口 径	胴 部 径	器 高	備 考
B I	124	×	15.7	×	8.7
	125	×	16.8	×	7.1
B II	120	8.4	15.4	23.0	8.7
	121	9.8	16.8	×	×
	122	7.6	×	×	×
	123	8.9	×	×	×

双耳瓶計測値 (単位 cm)

分類	番号	口 径	胴 部 径	器 高	底 径
A	136	14.0	25.5	33.7	15.5
B	137	15.0	×	×	×
C	138	×	17.2	×	9.8

分類	番号	口 径	胴 部 径	器 高	底 径
D I	139	×	16.0	×	×
D II	140	×	16.6	×	×

(小 村 茂)

Ⅶ 総 括

戸津5号窯跡は、南加賀古窯跡群の最北部近くの平安時代に属する須恵器窯跡が集中分布する地域に所在する。これまでに、10世紀中頃に編年される戸津8号・9号窯、須恵器終焉期に属する戸津3号・4号窯が発掘調査され、多くの新しい知見を提供している。

発掘調査の所見とその後の検討で得た結論をもってまとめにかえたい。

- 1 窯は、小松市戸津町地内に在り、小谷の南斜面の中腹よりやや下方に位置し、灰原は水田下に至っている。他窯の立地条件とはほぼ同様である。
- 2 窯の構築にあたっては、地表を浅く掘りくぼめ、天井部を築くものであるが、窯天井部を含めた窯体はほとんど地表に露呈する所謂半地下式窯に属するものと推測することができる。
- 3 窯の計測結果は、全長6m、最大幅1mを測り、床面の傾斜角は20～25度である。Ⅴ様式に属する小松市二ツ梨町一貫山1-Ⅱ号窯では、全長10m、幅2.3mであり、さらにⅥ様式の標識となる河北郡高松町黒川2号窯になると、全長約7m、幅1.2mであり同じく本期に属するかやゝ下降すると考えられている河北郡高松町みやの窯でも、ほぼ同様の数値を得ている。すなわち、Ⅴ様式では比較的広大な窯を構築し、器種的には既に量産体制を整えていた須恵器生産も、第Ⅵ様にいたって窯規模が縮小する傾向がある。この点については、昭和50年の概要報告書において、需要の停滞という被生産者側の要因と須恵器工人内部の拡散、再編成にともなう操業規模の縮小化に基因するものと考えてきた。奈良時代中期以降、窯業生産を支えた山野がしだいに郡領級富豪層の占有に帰しつつあったことを考えあわせるとき、燃料資源の獲得が制限された結果、熱効率のよい小型窯へと移行したことが推察できる。
- 4 出土した須恵器を大別すると、蓋、環、皿、台付環、盤、鉢、壺、瓶類に分けられるが、各器種の量的比率をみると、蓋11%、皿35%、盤10%、台付環2%であり供膳形態が全体の72%を占めている。他窯の量的比率をみると、黒川2号窯では約200個体のうち、台付環20%、環75%を占め、他に双耳瓶、葉壺、肩衝壺、鉢が少量出土している。さらに洲衛1号窯になると、台付環、盤が10%に減少して、かわりに皿が50%を占めている。本案においても、前代の須恵器生産と比較すると、環、台付環の焼成比率が極めて小さくなり、かわりに皿、盤類の焼成が増加する。これとともに、双耳瓶、葉壺、長頸瓶など、器種分化が促進することもみのがせない。また、同一器種内での器形の多様化現象も、すでに量産体制にあった環、皿、盤類の生産にやゝ遅れ、以前として需要対象の広範さを示しているものと思われる。以上の点で、本案の操業時期を推論すると、黒川2号窯と洲衛1号窯の中間的時期を考慮することができる。ここでは一応、平安時代前期後半に比定したい。

(小村 茂)

戸津5号須恵器窯跡が存在する、白山山系の前山地帯は小松市戸津町から加賀市松山町に至る東西1,000m、南北5,000m、海拔50m前後の低丘陵である。

丘陵の南方、加賀市分校町地内に39基の古墳があり、5世紀末か6世紀初めと推定される銅製方格規矩四神鏡が出土した円墳があり、丘陵下端縁に築造された全長36mの分校高山の前方後円墳は5世紀末と考えられている。

このような古墳文化を背景として耐火土にめくまれた丘陵地域内に、130基を越える須恵器窯跡から室町時代に至る中世窯跡が存在しているが、その正確な実態が把握されていない。

丘陵内の窯跡の調査は既往の調査の項で宮下がふれており重複するが、須恵器窯跡では小松市戸津1号窯跡（平安後期）、同二ツ梨・貫山1、2号窯跡（奈良後期）、二ツ梨（オクダニ）8号、10号、13号窯跡（奈良後期）、加賀市分校1～6号窯跡（6世紀末）、箱宮3号、5号跡（奈良後期～平安前期）が調査されている。

中世窯跡では、小松市二ツ梨奥谷1号窯跡（平安末～鎌倉初）、那谷大王谷1号、2号窯跡（鎌倉後）、加賀市箱宮1号窯跡（平安末～鎌倉初）であり、集計すれば須恵器窯跡で14基、中世窯跡で4基である。調査により判明した生産年代は6世紀末より鎌倉後期であるが、丘陵内には6世紀初葉の須恵器破片の地表散乱が認められ、窯跡の存在推定も不可能ではないと考えられる。仮に窯業生産開始が、すでに判明している6世紀後半からとしても南加賀の須恵生産の発祥地とすることができよう。また窯跡未確認ではあるが、小松市戸津3号、4号窯跡は平安末と考えられるところから、南加賀の須恵器終焉期の生産地でもある。中世窯跡は小松市那谷町小天王谷、カミヤ谷で未発掘ではあるが、室町時代の窯跡の存在を確認しているから、東西1,000m、南北5,000mの南加賀古窯跡群の所在地域内の窯業生産は少なくとも、6世紀後半より室町時代に至る期間継続されていたと考えられる。

すでに述べた如く、既往の調査により得た資料は断片的であって、南加賀の須恵器焼成技術が導入された初原の形態や、生産終焉に至る間の築窯や窯構造の変化、須恵器型式或は生産工程、工房跡、工人集落跡の時代的な流れが不明であり、また還元焰焼成の須恵器生産から常滑の技術の影響下に出現したと考えられる酸化焰焼成による加賀古陶の中世窯業生産への移行形態もまた不明である。たとえば昨日までは還元焰で須恵器を焼き、今日よりは分焰柱をもつ窯で酸化焰で加賀古陶を焼いたと云うように、生産過程の変化は簡単にわりきれぬものであろうか。窯業生産の革命的な生産工程の技術変化がそのように単純に受け入れられたものでない。技術変化の受け入れには、それに相応する文化的背景があったと考えたいのである。

こうした南加賀窯跡群の調査は多くの未解決な問題を抱えている。調査不十分の原因としていろいろの事が考えられるが、その一つは既往の調査のほとんどは開発工事による緊急調査であって、系統的な調査が出来なかったことも理由の一つと考えてもまちがいはなさそうである。今回の調査は農道構築の工事により、窯跡断面が露出したために窯跡の存在を知り得たのが調査開始の発足であった。発掘調査による遺物の出土量は少なかったが、それでも南加賀の窯業生産過程

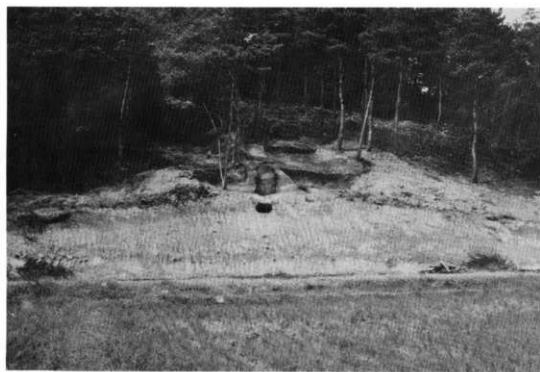
研究の空白期の一部を埋めることが出来た。それは単に空白期の或る時期の窯跡が発見されたと云うことよりも、窯体の構造、遺物の項で述べている如く、多くの新しい知見を提供してくれた。しかしこの新しい資料は、一窯跡の資料としてのみとらえるべきでなく、南加賀の窯業生産の変化過程の文化史の流れの中に窯跡の持つ意義を考えるべきものであろう。

最後に付記しておきたいことは、現在南加賀の土木開発は各地で急ピッチに進められており、埋蔵文化財の消失危険度も大である。緊急調査と云う時間に制約された不十分な調査よりも、今回のように腰をおちつけた調査が行わなければ南加賀の窯業生産を含めた古代史の実態が永遠に不明となる恐れがある。開発予定地の埋蔵文化財は開発工事開始に先立って、早急に調査体制をととのえなければならない事を強調しておきたい。

(上野 与一)



調 査 前



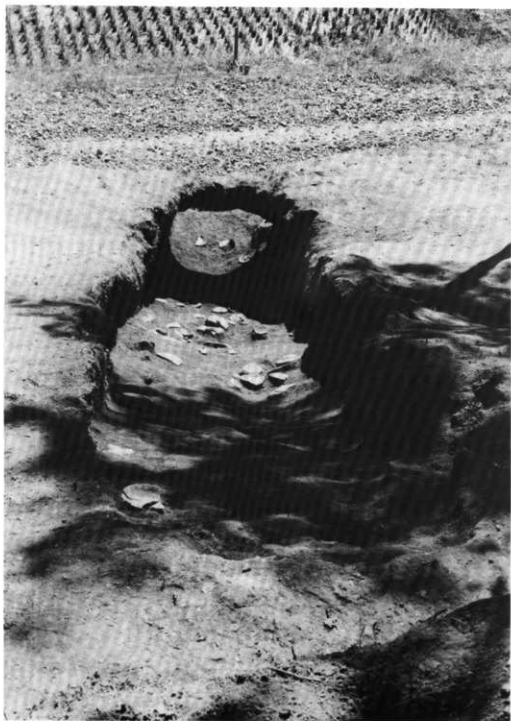
調 査 後 全 景



戸津5号窯跡



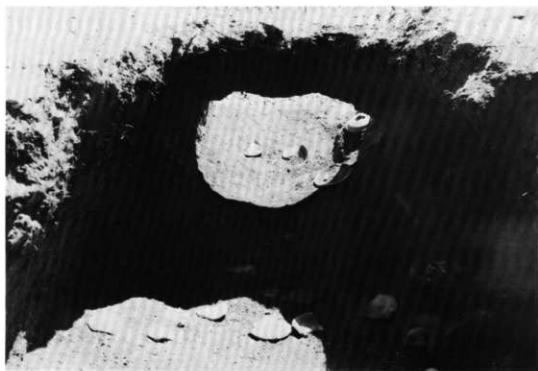
戸津5号窯跡遺物取り上げ後



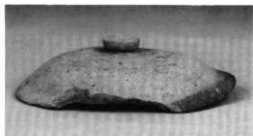
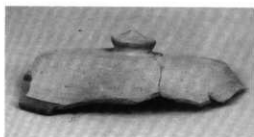
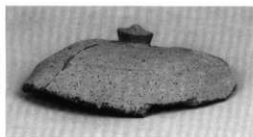
戸津5号窯窯尻より

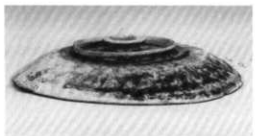


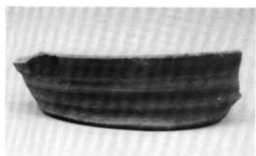
戸津5号窯焚口部



同焼成部より





















戸津 5 号 窯
石川県古窯跡調査（第 4 次）報告

昭和 54 年 3 月 20 日 印 刷

昭和 54 年 3 月 30 日 発 行

発行所 石川県教育委員会

印刷所 株式会社橋本確文堂